

# アウトドア用車椅子を活用したインクルーシブトレッキングの効果

— 参加児の発言及び行動観察からの考察 —

加藤彩乃（信州大学）

キーワード：学習旅行、野外活動、行動変容

## 1. 背景と目的

昨今、学校現場では、多様な子どもたちが一緒の場で学ぶ「インクルーシブ教育」が推進され、物理的な学習環境の整備や、合理的な配慮の提供、授業実施方法の工夫などがなされている。しかし実際は、適切なプログラムの提供がされていない場合も少なくなく、子どもたち同士の関わり合いが見られないことや、差別や偏見意識が助長されてしまう可能性があることも指摘されている。特に校外学習や自然体験学習などの野外での学習については十分に環境整備されていないのが教育的な課題である。

また、インクルーシブ教育の効果検証の観点からいえば、健常児の障害に対する理解度や、障害児の学習参加の視点から評価されている。しかし、共生社会の実現には、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」ことが求められていることから推察すると、関わる人々の相互作用により、関係性が変わっていくことを捉えていく必要があると考えられる。

よって本研究では、発表者らがこれまで県内で構築してきた野外学習環境をフィールドにした、インクルーシブ野外活動の実施効果について、障害のある子どもと障害のない子どもの関係性の変化に着目し明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 対象

A 地区で実施される環境学習及びトレッキングのパッケージプログラムを体験する学習集団 M を対象とした。学習集団 M は、修学旅行の一環で 202X 年 10 月に A 地区に訪れ、車椅子を利用する児童 1 名と、同級生 12 名及び車椅子利用児の介助教員 1 名で構成される集団である。担任からは、2 年間同じクラスであり、同級生の車椅子利用児に対する意識は良好である旨確認している。

### 2-2. アウトドア用車椅子を活用したトレッキングの実施方法

A 地区の学習ホールにて、環境学習及び SDGs の観点から座学が 30 分程実施され、その後フィールド学習として自然を観察する 2 時間のトレッキングが行われた。トレッキングコースは平坦な道だけでなく、砂利や岩、急坂などがあるため、生活用の車椅子ではなく、アウトドア用車椅子を活用した。アウトドア用車椅子の操作は、大人が安全確保のためのコントロールをし、クラスの仲間が 4~5 人で前方を順番に引っ張りながら列を組んで

行った。

トレッキングのガイドは、A 地区ガイド協会に所属し、インクルーシブ野外活動指導員養成講座（長野県・信州大学共同講座）を修了したガイド 1 名が担当し、サポート役として、講座の技術講師 1 名が入った。また、発表者は、学習集団の観察者として参画した。

なお、事前学習及び介入説明のため、担当ガイド・技術講師・発表者は学校に訪問し、学習集団 M とコミュニケーションを取っている。

### 2-3. 分析方法

アウトドア用車椅子に 2 台の小型カメラを取り付け、トレッキング中の車椅子利用児の表情及び、同級生の様子や発言を記録した。これらの記録をもとに、トレッキング開始時から終了時までの車椅子利用児及び、同級生の発言及び行動の変化について、関係性の変化を軸に分析をした。

なお分析については、サポート役として子どもたちの様子を間近で観察していた技術講師と共有確認した。

## 3. 結果と考察

トレッキング開始直後及び、平坦なコースでは、相互の積極的な関わりはあまり見られず、車椅子利用児は、自分に任された、学習の場や、植物などを撮影する写真係を自分のペースで全うしていた。

しかし時間の経過と共に、徐々にコースが砂利道や、滑りやすい道、急坂になるなど難易度が高まるにつれ、車椅子利用児及び同級生が相互に声を掛け合い、安全なルートへの提案や、応援の声かけをしていた。また、同級生の方からも、車椅子利用児に「あの木の写真を撮って」という発言や、ガイドの説明している具体物が車椅子利用児に見えやすいようにスペースを確保するなどの行動が見られるようになった。さらには、同級生同士の関わりでも、お互いを思い、役割やフォーメーションを変えながら進んでいく様子が見られた。

以上のことから、少しハードルのある課題を一緒に進むという共通の目的を達成していく過程で、無くてはならない互いの存在を意識し、積極的な関わりやチームとしての行動に変容していったのではないかと考えられた。今後はこの知見を基に、効果的なインクルーシブ野外教育プログラムを開発していく必要がある。

本研究は、信州大学研究推進事業の支援を受けて実施されました。研究に協力いただいたガイドの赤塚陽子氏、技術指導官の小泉二郎氏、子どもたちに感謝いたします。